

展示解説

展示室で掲出している解説文です。改行やルビ、挿入写真・図面、重複する文言などは省略しています。作品解説は、出品目録番号を付けています。解説のない作品もあります。

解説パネル

花鳥図障壁画

花鳥図の起源は中国唐時代にさかのぼります。身近にある花や鳥におめでたいイメージが与えられ、古くから絵画や工芸品の主題に取り入れられました。名古屋城本丸御殿の障壁画を描いた幕府御用絵師・狩野派は、室町時代にはじまった絵画流派で、中国絵画を学習し、自派の様式を確立させます。花鳥図も中国絵画学習のもと制作され、その様式は狩野派絵師によって受け継がれていきます。

本展では、江戸時代初期に制作された狩野派の花鳥図障壁画を紹介します。対面所納戸2室の「山水花鳥図」(出品番号1・2)は、狩野派花鳥図の定型を踏まえ、室内を取り囲む襖や壁に一連の景観を展開させます。植物や鳥を繊細に描き鮮やかに着彩することで、おだやかな春の空間を作り上げています。

一方で、上御膳所では多様な花鳥図障壁画が見られます。上之間「鴉花卉図」(出品番号3)は、画面に広く余白を残してわずかなモチーフを描くのみ、すっきりとした画風です。上段之間「枝垂桜図」(出品番号4)は、大きな桜の木から枝が垂れ下がり、桜が鑑賞者の頭上を覆っているかのように感じられます。

作品解説

1 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 対面所納戸上之間東側襖絵 「山水花鳥図」 江戸時代 慶長19年(1614) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

画面左の山、中央の榎の木を中心に春の山水景色が広がります。画面右端から伸びる枝には桜の花が咲き、尾長、緋連雀、雀などの実在する鳥を描いています。この4面には画面の主演となる大型の鳥は描かれず、小さな鳥が細密な毛描きと着色によって生き生きと描かれています。

2 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 対面所納戸次之間西側襖絵 「山水花鳥図」 江戸時代 慶長19年(1614) 名古屋城総合事務所蔵 (後期)

一連の画面に春の山水風景とそこに集う鳥を描きます。納戸上之間「山水花鳥図」(前期展示・出品番号1)と同様に水景が場面をつなぐ構成をとり、画中のモチーフにも共通点が多く見られます。春の植物は鮮やかな絵具で彩られ、榎の枝にとまるカケス、土坡であそぶ山鵲などの鳥類は繊細な筆致で描かれています。

3 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 上御膳所上之間西側襖絵 「鴉花卉図」
江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

2面の襖に岩と白い花卉の花弁、2羽の飛翔する鴉のみを描きます。背景のほとんどを素地のままとしており、上御膳所の障壁画のなかでもかなり余白が多くとられています。墨の濃淡とにじみを活かして鴉の黒い毛を描いていますが、全身黒い羽根ではなく腹部は白いことから、鴉ではなく叭々鳥を描いた可能性も考えられます。

4 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 上御膳所上之間東側襖絵 「枝垂桜図」
江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (後期)

2面の襖に枝垂桜の大木を描きます。上御膳所上段之間を飾る障壁画で、裏面は上之間「鴉花卉図」(前期展示・出品番号3)です。余白を多く残す裏面に対し、本作では画面を覆いつくすほど大きく枝垂桜が描かれています。幹の輪郭はうねりのある太い墨線で引かれますが、花や葉は輪郭線を引かず着色のみで描く没骨法の手法をとり、優雅な印象を与えます。

5 「花見図屏風」 今村養寿筆 江戸時代後期 18～19世紀 名古屋城振興協会蔵
(前期)

金の霞がたなびく山間で満開の桜のもとに集う老若男女を描きます。画面上部に桜が咲く遠山、中央に主題となる花見、下部に水景を描く簡潔な画面構成ですが、景物の重なりや点描の密度を変え、画面に奥行きを与えます。花見の場面では1枚ずつ描かれた桜の花びら、人物の細い輪郭線や繊細な着色など、とりわけ丁寧に描かれており、力が入った作品であるとうかがえます。

屏風表面は狩野派に学んだ尾張藩絵師・今村養寿(生年不詳～1808)が描き、裏面には同じく藩絵師の神谷養秋(生年不詳～1811)が「松竹梅図」を描いています。

5 「松竹梅図屏風」 今村養寿筆 江戸時代後期 18～19世紀 名古屋城振興協会蔵
(後期)

三日月が浮かぶ夜空、水辺に生える若松・竹・梅を描きます。本屏風表面「花見図」(前期展示)は金砂子の霞に色鮮やかな着色の華やかな画面ですが、裏面「松竹梅図」は水墨を主体とし、松葉や梅の花、水面にのみ着彩します。若松と竹は真っ直ぐ上に伸びる一方、梅は弧を描くように屈曲し、水面をくぐって枝先を横へ伸ばします。

松竹梅は歳寒三友といい、寒い冬にも青々と茂る松と竹、春の訪れを告げる梅の花は、高潔な植物として好まれました。また、月夜に咲き香る梅の美しさは古くから漢詩に詠まれ、水墨画に描かれてきました。

8 名古屋城ガラス乾板写真 「対面所納戸上之間(焼失)南西側」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵 (通期)

対面所納戸上之間の南西側を写します。西側の大床の壁には2本の松が描かれていました。南側壁貼付絵は水景に桜や松の木、宙を飛び交う小禽が描かれています。画面下部の水

景と、呼応するように視線を交わす鳥によって、場面の連関が図られます。

9 名古屋城ガラス乾板写真 「対面所納戸上之間（焼失）東南側」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵（通期）

東面「山水花鳥図」（前期展示・出品番号1）と南側の壁貼付絵を写します。障壁画は部屋の角に槇や桜の木、山など構図の重心となるモチーフを配しており、室町時代以来の狩野派による伝統的な大画面構図に基づき描かれています。

10 名古屋城ガラス乾板写真 「上御膳所上段之間（焼失）西北側」 昭和15～16年(1940～41)頃 名古屋城総合事務所蔵（通期）

「枝垂桜図」（後期展示・出品番号4）が飾られていた上段之間を写します。西北側の壁貼付絵の花鳥図は、部屋の角に樹木と小さな滝を描いて構図の重心とする点、また景物の描法に室町時代の狩野派の影響を認められることから、古様な作風と言えます。

11 「堀川通絵図」 江戸時代後期 19世紀 名古屋城総合事務所蔵（通期）

慶長15年（1610）、徳川家康の命により名古屋城の築城が始まり、必要な資材を運び入れるため、伊勢湾と名古屋城下を南北につなぐ堀川が開削されました。堀川は名古屋城築城後も尾張藩の水運の要所となり、様々な物資が堀川を通して届けられました。本資料には、尾張藩が実測した堀川両岸の寸法と、蔵屋敷の所有者が詳細に記録されています。

12 「堀川日置橋より兩岸の櫻花を望む図」（『尾張名所図会 前編』巻2より） 明治13年(1880)復刻版 天保15年(1844)初版（通期）

堀川にかかる日置橋は、江戸時代文化年間（1804～18）に桃と桜の苗が植えられ、その後花見でにぎわうようになりました。『尾張名所図会』では、尾張藩絵師・森高雅（1791～1864）の挿絵によって堀川の桜並木が紹介されます。日置橋付近の満開の桜と、橋や船の上からそれを楽しむ人々が細やかに描かれています。

13 「堀川観桜船図」 江戸時代後期 18～19世紀 名古屋城振興協会蔵（前期）

堀川で花見をする人々を描きます。長い堀川は画面左を起点とする遠近感のある構図で描かれ、川沿いでは桜の花が咲き誇ります。船上は楽器の演奏や飲食に興じる人々でにぎやかな様子です。緻密な細部描写も見逃せません。先を行く船や橋の上、川沿いの建物の中にも人々が描かれています。桜の名所・堀川を丹念に描いた優品です。

14 「嵐山春景図」 中林竹溪筆 江戸時代後期 19世紀 名古屋城振興協会蔵（後期）

『尾張名所図会』（出品番号12）には、尾張の堀川は嵐山や隅田川にも劣らない桜の名所と記述があり、京都の景勝地・嵐山は尾張でも桜の名所として広く知られていました。尾張生まれの文人画家・中林竹洞（1776～1853）の長男である中林竹溪（1816～67）は、嵐山の風景を多く描きました。本作では墨や彩色の濃淡を繊細に変化させ、桜咲く春の明るい景色を巧みにあらわします。

15 「なごや鯨三題 桜の八事山を望む」 石川英鳳画 中村浪静堂刊 昭和時代 20世紀 名古屋城振興協会蔵 (通期)

名古屋城大天守の金鯨と遠くの風景を描く3枚シリーズの1枚です。城下で桜が咲き、遠景の八事山も淡いピンクに染まる春の景色が広がります。八事山とその麓に建つ興正寺のほか、画面左には工場が見え、上空には複数の飛行機が飛んでおり、近代的な光景が描かれている点でも興味深い作品です。

16 「名古屋城図」 土屋光逸筆 昭和12年(1937) 名古屋城振興協会蔵 (通期)

西之丸から見た大天守を描いた新版画です。新版画とは、大正時代に始まった、伝統的な木版画技法を用いた版画のことをいいます。大天守は正確に描かれていますが、前景の桜は、実際には梅林がある位置にあたるため、実物に即しつつ植物に改変を加え、春の名古屋城を描いたと考えられます。浮世絵師の土屋光逸(1870~1949)は、61歳にして新版画の制作を始め、本作の版元・土井貞一(1876~1945)の元で多くの新版画を制作しました。

17 「梨子地花車蒔絵長文箱」 江戸時代 18~19世紀 名古屋城総合事務所蔵 (通期)

隅丸の長方形で被蓋造の文箱です。蓋の両側に刳形を設け、身の両側には葵紋の金具を打ちます。全体を梨子地とし、蓋表には花車が大きく描かれます。花車に載せられた梅、燕子花、牡丹、朝顔、菊、紅葉、水仙など四季の草花は、金と銀の蒔絵で精巧にあらわされています。

18 「梨子地葵紋散桜花文盃、盃台」 江戸時代 17~18世紀 (通期)

盃台は客に酒をすすめる際に盃を載せる器です。本盃台は円形で底に高台がつきます。盃と盃台は、全体を梨子地に金蒔絵の桜の花をあしらい、徳川の葵紋を配します。梨子地とは、漆を塗った上に金や銀の梨地粉を蒔き、その上から透明漆を塗る蒔絵技法をいいます。盃の見込み(器の内側)には、水景に鶴や亀、松といった吉祥的なモチーフが描かれています。

19 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院天井画「花図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

湯殿書院の天井画には花を描いた面が多くあります。本作に描かれた花の種は不明ですが、1本の枝から5つに裂けた葉と白く小さな花が描かれます。このような枝先のみを描く花の図を折枝画といい、中国・宋時代の宮廷で制作された作品に由来します。

20 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院天井画「梅朧月図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

朧月を背景に、夜の梅を描きます。輪郭の外側に薄い墨を塗る外隈の技法により、暗闇で咲く梅の花びらの白さを際立たせます。梅は春に最も早く咲く花で、まだ寒さが残る頃に春の訪れを感じさせます。

21 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院天井画「椿図」 江戸時代 寛

永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

白い椿の花、葉、蕾をあらゆる角度からとらえます。抑揚のある輪郭線に緑の緑青や白の胡粉で着色し、葉脈には金泥線を沿わせて華やかに描いています。椿が咲く時期は種によって様々ですが、和歌では春の季語として詠まれました。

22 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 湯殿書院天井画「桃図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

桃は春に花を咲かせ、夏に実がなり旬を迎えます。中国で桃の実は出産や魔よけの象徴とされ、また古代中国の女神・西王母の伝説から長寿を意味するようになり、おめでたいモチーフのひとつに数えられます。

23 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿障壁画 上洛殿入側天井画「菊文図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (前期)

上洛殿入側(廊下)の天井には、緑と白の「桐文図」と「菊文図」が交互に並んでいます。「菊文図」は周囲に花菱文をめぐらせ、中央に大きく菊文を描きます。菊文の周りに金砂子を蒔き、菊の蕊も金で着色した豪華な天井画です。

24 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿 上洛殿一之間天井画「藤図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (後期)

25・26 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿 上洛殿二之間天井画「藤図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (後期)

上洛殿一之間と二之間の藤の花を描いた天井画です。一之間「藤図」では、藤の蔓と蕾を墨の線と点のみであらわします。葉は部分的に緑の顔料を施しますが、墨の濃淡を活かして描かれます。一方で、二之間「藤図」は流麗な筆線で花や葉、蔓を描き、葉に鮮やかな緑青を塗り、華やかに描かれます。この描き方の違いは、着色画よりも墨画が格の高い絵画と考えられていたことによるもので、格の高い一之間「藤図」を墨画主体で描いたとみられます。また、緑の装飾も部屋ごとに異なり、一之間は唐花文、二之間は線條つなぎ文があらわされます。

27 国指定重要文化財 名古屋城本丸御殿 上洛殿入側天井画「桐文図」 江戸時代 寛永11年(1634) 名古屋城総合事務所蔵 (後期)

上洛殿入側(廊下)の天井には、緑と白の「桐文図」と「菊文図」が交互に並んでいます。「桐文図」は中央に大きく桐文を描き、桐の葉と花の色を白または緑で着色して変化をつけています。葉脈と茎に金泥を塗り、桐文の周りには金砂子を蒔くなど、金を多用する豪華な天井画です。